審　査　結　果　の　要　旨

論　文　題　目　「特別支援学級教諭と外部専門家との連携に関する研究－言語聴覚士による実践を通して－」

学位申請者　池田　泰子

本論文は、特別支援学級における外部専門家、特に言語聴覚士との連携について、特別支援学級教諭のニーズと阻害要因を検討し、連携の基礎プログラムを提案することを目的としている。

第 1 部では、特別支援学級が、視聴覚障害や知的障害など多様な障害を持つ児童生徒の支援を行っており、専門知識に基づいた指導が必要にもかかわらず、特別支援学校教諭免許状を持たない教諭も多く、言語聴覚士のような専門家による連携と支援が望まれる現状を指摘している。

第 2 部では、まず、特別支援学級教諭の専門的知識と外部専門家からの支援に関するニーズを理解するために、質問紙調査を実施した。その結果、多くの教諭が、心理検査を通した児童生徒の認知面に関する情報を要望している一方、様々な心理検査がそれぞれどのような認知特性を検査しているのかなどの専門知識を持っておらず、児童生徒に対応する上で、言語聴覚士などの外部専門家からの支援を必要としていることが明らかになった。

次に、外部専門家に求める連携内容や連携の阻害要因について分析を行った結果、彼らの多くが、心理検査による児童生徒のアセスメントや、指導方法のアドバイスなどに関するニーズを強く有していることが示された。また、特別支援学級歴の少ない教諭には、心理検査の理解と児童・生徒の障害への理解を促すことが必要であり、一方、経験豊かな教諭では、専門家との連携を求めている一方で、時間的な余裕がないことが連携の阻害要因になっていることが示された。

第 3 部では、言語聴覚士が、特別支援学級の教諭と実際に連携を行い、その効果と課題を調査した。まず、心理検査を用いた児童のアセスメントの結果、特別支援学級在籍児は、知能と言語の両面で大きな個人差があり、特別支援学級の教諭が、多様な障害を抱える児童に対して適切な指導を行うことが難しく、外部専門家の支援が必要であることが示された。

さらに、教諭に対して心理検査の説明と適切な指導方法を提案し、教諭の質問に答えるといった相互交流が、連携の効果を高めること、提案した指導方法を定着させるためには、継続的な連携体制が有効であることも示された。

第 4 部では、上記の調査研究から得られた知見と意味をまとめた上で、特別支援学級における外部専門家との有効な連携に関する基礎プログラムを提案し、今後の課題を検討している。

このように本論文は、特別支援学級の教諭が抱える問題と、教諭と外部専門家との連携に関するニーズや課題などについて、実践的な知見を明らかにした意義ある論文であると考える。

以上のことから、本論文は、学位論文として十分な内容を有するものであると、審査委員全員の一致で判定され、学位申請者である池田泰子氏は、東海大学博士（文学）の学位を授与されるに値すると判断するものである。

論文審査委員

主査 修士（文学）	浅井　千秋	文化社会学部教授	（文学研究科ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学専攻）
委員 博士（医学）	中島　香澄	文化社会学部教授	（文学研究科ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学専攻）
委員 博士（法学）	小川　恒夫	文化社会学部教授	（文学研究科ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学専攻）
委員 博士（臨床心理学）	中島　由宇	文化社会学部准教授	（文学研究科ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学専攻）
委員 博士（学術）	能登谷 晶子	福井医療大学保健医療学部特任教授	（ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学科）